



朝日新聞東京本社  
東京都中央区築地5丁目3番2号  
〒104-8011 電話03-3545-0131  
©朝日新聞東京本社 2000

# 「日中」の歴史も今も熱く撮る

## 在日中国人の 留学生の生活ドキュメントに 張麗玲さん



次を期待する声が少ない。「私は制作のプロじゃない。このテーマだから撮ったわけで、今は考えていない」と張麗玲—東京都内で

日本に住む中国人留学生を追い、ドキュメント番組を仕上げた中国人女性がいる。張麗玲(三三)。番組を撮り始めるまで、ドキュメントとは無縁の、日本語ひとつ知らない留学生だった。完成した十本シリーズ「私たちの留学生活(日本での日々)」は中国各地で放送され、大きな反響を呼んだ。そのうちの一本「小さな留学生」が、五日午後九時からフジテレビ系で放送される。

### 5日夜、フジ系で放送

「小さな留学生」は、四年前に日本で働く父と暮らすことになった少女の物語。当時九歳だった少女は、父と再会したとき「私は一番になる」と言い出す。「中国と民族のために。だって、日本は中国を侵略したんですよ」

そんな少女が、「敵視」していた日本の級友や先生たちに支えられる。二年後、すっかり日本にとけ込んだ少女は、父の会社の都合で帰国を余儀なくされる。場面は中国。同級生が「日本で幹部になったか?」と問う。少女は答えた。「いいえ、もっと大事なことがあるのよ」

昨年十一月、北京テレビでシリーズが十夜連続で放送されると、中国各地のテレビ局から放送希望が殺到。これまでに三十省市で、そして香港で

も放送が実現した。娘の学費のために日本で働き続ける人、孤独感に耐えかね帰国する人……。作品は留学生の苦悩だけではなく、日本人との心の交流を描いた。南京の市民に「これが本当の日本人なのか」と驚かされた。

張は「日本人と中国人は、互いにとても損をしている」と言う。一番悲しいのは、たった一つの傷から、すべてを否定してしまう人があまりに多いこと。「知らないこと、知ろうとしないこと、不幸。中国も日本も知る私が、その間に立てたら」

四年前から始めたインタビューは三百十五人に上る。うち六十六人を追跡取材したテープは千本に。取材は夜か休日。休む日もなく、倒れて入院したこともあった。番組実現の後押しをしたフジテレビの横山隆晴プロデューサーは「素人だから計算がない。何かにつかれたような、使命感の固まりだったんだと思う」と話す。

五年前、何の前ぶれもなく張が横山を訪ねたのが、二人の出会いだった。いきなり「VTRカメラを貸してください」。カメラがあればドキュメントを撮れると。

初めて取材に同行した日に目を見張った。「撮影技術は稚拙。でも対象への距離感や、心そのままをすくい取る力にかなわないと思うた」。横山はサポート役に徹し、張の姉妹や中国時代の友人らが手弁当で協力した。

同局の放送予定は「小さな」だけ。視聴者の反応を見て、他の作品を放送するかどうか決める考えだ。



「小さな留学生」から。日本の小学校への初登校日。日本語に困まれ、涙があふれる

芸能